

音楽II：のびのびと表現する

原 大 介

1 授業内容設定にあたって

わたしがかつて見学させていただいたある学校では、社会のIT化にともなう教育の変容という名のもとに、全教科に積極的にパソコンが導入され、生徒もいきいきとパソコンに向かい、自分の趣向・進度にあった作業を思い思いに進めるという、前進的な内容をもっておこなわれた。こと音楽では、取り巻く環境にもとづく音楽的個人差が特に大きいことを配慮し、あるものはインターネットを活用して自分の興味をもった音楽をそれぞれ自由に調べ、またあるものはノートーションソフトを使用して歌謡曲を自分なりにアレンジしたり、あるいはより快適な音楽ライフを過ごすための空間づくりを自分なりにクリエイトする、といった『個』を最大限尊重する工夫がなされ、音楽が得意な子、不得意な子にかかわらず参加できる授業の試みという意味では非常に新鮮であった。一方で、他人とのかかわりが希薄になりつつあるこのIT化社会のなかで、他人への思いやりとか、協調性とかいった社会性を身につけるための情操教育として音楽への期待が大きく、これは音楽が学校教育における唯一といってよい存在意義ともいわれる中で、一般に批判的にとらえられがちで、一斉授業で行なうような合唱などでしか味わえない、50人近い人数がひとつのものを作り上げてゆくといった喜びといったものを再確認するような授業ができれば、と思ったのも確かである。100年の歴史における音楽教育でつちかわれた決して失ってはならないもの、すなわち、音楽に接するもののみが味わうことのできる情操面での『連帯的充実感』が尊重されるような授業とはいかなるものなのだろうか。

さらに、高等学校学習指導要領による、『日本（アジア）の音楽の積極導入』も叫ばれる今日、いままでもクラシックの世界にのみ生きていた私にとって、教材探しという初歩的なところから困難がつかまとう。

生徒のニーズと文科省の意向に敏感に対応ができるほどの教材と指導法はまだまだ勉強の真っ最中なのではあるが、授業に要求される「音楽性」と、それにとともなう「社会性」といったものを身に付けさせる工夫として自分なり以下のような目標をたて授業にのぞんだ。

<研究仮説>

- ① 歌唱、器楽、創作、鑑賞すべての範疇を網羅すれば、生徒のニーズにある程度応えられる。
- ② 歌唱において、大人数での合唱では、楽譜が読める生徒は積極的に歌い、読めない生徒は聴覚を

充分に使って自分の音として取り入れることにより、全員が積極的に参加できる環境を作り得る。また、表現力のある生徒を積極的に導き、声の出ない生徒はそれにつられてすこしずつ表現のすでをしる相乗効果もある。さらに、自分が専門である独唱を取り入れることによって、表現力のさらなる増大を期待できる。

- ③ 器楽において、所有楽器の数的問題から、全員一斉授業は無理である。一方でピアノ、ヴァイオリンといったさまざまな体験をしてきた生徒もいるので、そういった個々の生徒の能力を十分に発揮できる形体として、アンサンブルは最適である。今回は、『沖縄』というくりでの発表を考えたので、三線等の楽器に触れることを通じて日本の音楽への門戸を開くという効果も期待する。
- ④ 創作において、平易な対旋律を機械的にはめていく作業の中で、コードとメロディーの関係といったものに目を向けさせる、そして、各自が普段カラオケ等で本能的につけるハモリのメカニズムを、理論的に解決する能力を身に付ける。理論よりも実践を重視した、生徒たちのニーズに応える内容である。さらに、それで仕上がったものを実際に譜面にあらわすことによって楽譜への興味、さらにはノーテーションソフトを使うといった需要をうみ、情報化社会にも対応できるスキルを身に付ける。

2 使用教材とその領域

当日おこなわれた授業内容は次のようなものである。（2時間分）

「海の不思議」（平吉毅州 作曲 川崎 洋 作詞）

- 歌唱………合唱教材として。表現の多様性・豊かな響きを求めて

「Best Friend」（玉城千春 作詞作曲）

- 創作………コードにそったハモリの原理。
- 歌唱………できあがった後は合唱教材として。

『沖縄的音楽の発表』

- 器楽………さまざまな楽器を用いたアンサンブル
特に三線（代替として三味線）などの日本楽器の体験
- 鑑賞………相互鑑賞を通して。互いを理解しようとする精神

3 研究協議とまとめ

ご来場いただいた各校諸先生のほかに出版関係（教科書）の方もまじえ、なごやかな雰囲気の中で活発な意見が交わされた。

歌唱に関しては、生徒たちが生き生きした表情で歌っていることに感心する一方で、曲の完成度という点ではもう少し楽譜にたちかえって作曲者の意図をくませるべきという意見が出た。これは合唱を扱

う際に、楽譜が読めない生徒にも無理なく導入できるようにという意識が働きすぎ自分自身があまり楽譜にたちかえていなかった反省点でもある。また、今回は教師主導であったが、あえて生徒に指揮させることによって、教員の気付かない楽曲の一面が見えてくるといった効果を生むことを付け加えられた。

創作に関しては、実は今回のコードに頼ったパズル方式だと、複雑なメロディーになったときに対応できないことをわたしは述べさせてもらったが、特に意見が出ず研究課題として持ち帰らせてもらった。

器楽に関しては、よくある「なんでもよい」という提起ではなくあえて『沖縄』に限ったアンサンブルとすることによって、逆に生徒たちの想像力を励起させるきっかけになったのではないかということであった。今回はある意味オーソドックスな授業が基本ではあったが、貴重なご意見ご指導によって、学校における一斉での音楽授業の可能性を自分なりに再確認できた。元本校教官久保先生、中嶋先生、またご来場くださった先生方のご指導に厚く感謝する次第である。